

沖縄県公文書館 常設展特別企画

米海軍資料に見る

海の沖縄戦展

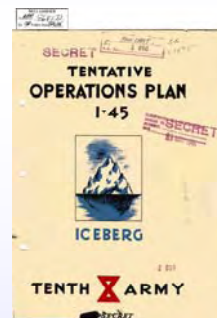
「沖縄戦って海でもあったの？」

これは、多くの人が持つ疑問かもしれません。

沖縄戦は、およそ3ヶ月にわたって繰りひろげられた地上戦に目が向けられがちですが、周辺を海で囲まれた沖縄では、海上でもしれつな戦いが繰り広げられました。

大艦隊で押し寄せた米軍に対し、日本軍は決死の「特攻隊」を送りこみ、3千人以上が命を落としました。一方、米軍は沖縄戦での全犠牲者の4割にあたる約5千人を海上で失っています。また、輸送船や疎開船の沈没などで子供たちを含む多くの県民が海で犠牲になりました。

	日本軍 	米軍 
総兵力	102,000（戦闘兵力）	183,000（戦闘兵力）
		365,000（支援部隊）
艦船	300～400（海上特攻艇）	1,500（支援部隊含む）



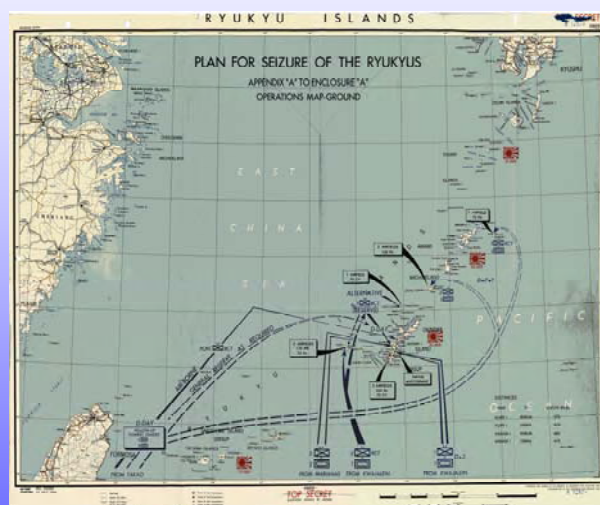
米軍作戦計画書表紙



米軍作戦報告書表紙挿絵

沖縄県公文書館と米国側資料

沖縄戦に関する米国側の記録は、1970年代後半から公開が始まり、多くの研究者や国・自治体が海を渡ってその発掘につとめました。しかし、その多くは地上戦に関する記録でした。沖縄県公文書館は1997(平成9)年から約10年間、アメリカで沖縄戦や戦後のアメリカ統治に関する記録の調査・収集に取り組んできました。その際、国や先行自治体との重複をさけるため、海軍関係などそれまで未発掘だった記録に特に焦点をあてて収集してきました。現在これらの整理を進めており、今回紹介する記録はその一部です。



米軍作戦計画地図

米軍は戦況に応じて絶えず作戦を練り直していました。上は、1944(昭和19)年7月時点での沖縄侵攻計画を示した地図です。

台湾、マリアナ、マーシャル諸島から移動した部隊が、沖縄本島、久米島、沖永良部島、奄美大島などへ上陸する作戦が描かれています。

しかし、実際には、久米島、沖永良部島、奄美大島などは決戦場にはなりませんでした。



南風原町新川の県公文書館

いくさ 沖縄に戦がやってきた

沖縄が最初に米軍の攻撃を受けたのは、1944(昭和19)年10月10日でした。これには、フィリピンへの上陸作戦をひかえ、米軍が台湾や沖縄などからの航空機による支援を阻止しようとするねらいがありました。

空母7隻、護衛空母8隻、高速戦艦5隻、重巡洋艦4隻、軽巡洋艦7隻、対空巡洋艦3隻、駆逐艦58隻からなる高速機動部隊が沖縄近海に押し寄せ、その日のうちにのべ約1,400回にわたる出撃を行いました。

早朝から約9時間におよんだ攻撃で、那覇市の9割が焼失し、沖縄県全体で少なくとも600人が死亡、900人が負傷しました。

(参考:沖縄タイムス社『沖縄大百科』1983年)

攻撃	時間帯	主な攻撃地
第1次	6時40分～8時20分	那覇、嘉手納、読谷の各飛行場を中心
第2次	9時20分～10時15分	那覇飛行場、船舶、港湾施設
第3次	11時45分～12時30分	那覇(焼夷弾も)、与那原、馬天、泡瀬、名護、渡久地
第4次	12時40分～13時40分	那覇
第5次	14時45分～15時45分	那覇



炎上する那覇市街



焼けた那覇市街



焼けた那覇市街

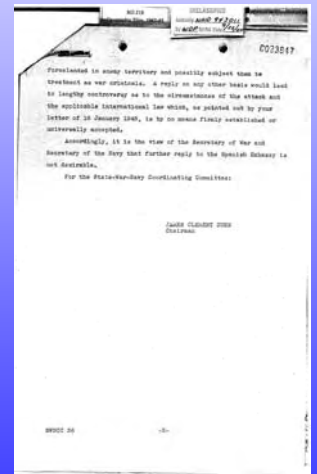
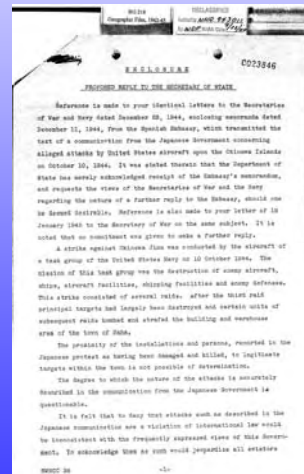
ジュネーブ条約違反

市街地の9割が灰になったことから、日本政府は空襲から2ヵ月後の1944(昭和19)年12月、在米スペイン大使館を通して米国政府に正式に抗議を申し入れました。

県公文書館が所蔵する米国資料の中に、この抗議に関する記録が含まれています。米国政府は、日本政府からの抗議内容を検討した結果、

- ・この攻撃は、米国政府がこれまで主張してきた見解から国際法違反とみなすものの、それを認めれば、米国人捕虜を危険にさらし、戦争犯罪人とされる可能性がある。
- ・抗議文にある空襲の実態がどれほど正確か確認できない。

などの理由から、黙殺する決定を下しました。



黙殺する決定を記した米統合参謀本部文書

しんこう

太平洋戦最大の侵攻作戦

米軍による沖縄侵攻作戦は、艦船約1,500隻、支援部隊を含めた約55万人で行われました。これは、太平洋戦争中、最大規模の上陸作戦でした。

各機動部隊は、航空機による攻撃、艦砲射撃、地上部隊の輸送、弾薬や物資の陸あげ、陽動作戦など、それぞれが特別な任務をにいました。その中には、英国機動部隊も含まれていました。

<第5艦隊の編成>

第50機動部隊(掩護・特別部隊)
第50.8機動部隊(兵たん支援部隊)
第51機動部隊(統合遠征軍)
第51.1機動部隊(西方諸島攻撃群)
第51.2機動部隊(陽動部隊)
第52機動部隊(上陸作戦支援部隊)
第53機動部隊(北部攻撃部隊)
第54機動部隊(砲撃・掩護部隊)
第55機動部隊(南部攻撃部隊)
第56機動部隊(遠征軍)(=第10軍)
第24軍団
第3海兵軍団
第57機動部隊(英国空母部隊)(先島諸島担当)
第58機動部隊(高速空母部隊)

地上部隊

英国艦隊の参加

英国艦隊の参加は、戦後の対日政策で発言力を持ちたいと考えていた英国のチャーチル首相の強い要望を受けたものでした。

しかし、当初、米海軍指導部は、指揮系統や作戦方法の違う英艦隊に参加させるのに消極的でした。

度重なる協議の結果、英艦隊は沖縄本島の主要作戦ではなく、日本軍の航空部隊がある先島諸島の制圧に投入されることになりました。



沖縄進攻出発前、
ウルシー沖に結集し
た米艦隊



英空母

英空母は防御に重点が置かれていたため、4隻すべてが被爆したにも関わらず、被害は少なく、作戦遂行に支障は出ませんでした。

しかし、大西洋の比較的寒い地域で活動する構造になっていたため、沖縄のような亜熱帯地域の高湿多湿の環境には不適でした。

米軍は侵攻作戦を成功させるために周到に準備を進めました。

艦砲射撃を担った砲撃・掩護部隊である第54機動部隊が1945(昭和20)年3月5日から21日までウルシーで予行演習を行ったほか、ガダルカナルでは北部攻撃部隊が3月1日から8日まで、フィリピンでは南部攻撃部隊が3月14日から21日まで、サイパンでは陽動部隊が3月16日から21日まで演習を実施しました。



カンポーヌ クェーヌクサー

上陸を8日後にひかえた1945(昭和20)年3月24日、米軍は上陸支援のための艦砲射撃を始めました。3月26日から4月1日までの間に、5つの砲撃隊が、上陸海岸地点、慶良間、那覇、南部一帯を担当し、実に5,160トンの砲弾をうち込みました。



ロケット搭載中型揚陸艦



運玉森

ちなみに、航空機からの爆弾投下や地上での砲撃なども含めると、沖縄戦全体では20万トンの爆弾が使われましたが、推計によると今なお2~3千トンにおよぶ不発弾が埋もれています。

「鉄の暴風(ほうふう)」

沖縄戦の際の米軍の激しい砲撃はのちにこう呼ばれましたが、これを避けるためには地下壕を掘ったり、井戸の中へ隠れたりしながら、命中しないことを祈るしかすべはありませんでした。

それでもこの「暴風」で多くの人が犠牲になりました。そして、それを生きのびた人々は、いつしか自分達のことを「カンポーヌ クェーヌクサー」(艦砲射撃のくい残し)と呼ぶようになりました。



上陸日の米軍艦



町をさまよう老父

へい 兵たん大作戦

200万トンの物資供給

戦闘部隊が長期間にわたって作戦を遂行するには、武器・弾薬、食糧、燃料のほか、衣類、医薬品などの物資を絶えず供給し続けなければなりません。

しかし、一番近いウルシー島やマリアナ諸島の基地からでさえ船で5日、米国西海岸からは26日もかかります。調達から荷づみ、輸送までをすべて含めると一つの補給作戦を完了するのに120日かかりました。米軍は、周到な補給計画を立てて沖縄戦に臨みました。

輸送船団は米国西海岸から上陸予定日の40日前に10日間隔で出港。上陸5日前にウルシー、エニウェツクに集荷、そこから沖縄へ向かいました。輸送船団は巡洋艦や駆逐艦のほか、時に空母まで動員して輸送船団を護衛しました。



沖縄に向かう途上の第12輸送船団



物資の荷下ろし

米軍は、沖縄上陸の際、430隻余りの輸送船で18万人の兵士とともに75万トンの物資を陸あげしました。その後3ヶ月の間に陸あげされた総量は200万トンにのぼりました。

また、洋上の艦船にも絶え間ない補給が必要でした。例えば、第58高速空母群に2日間で供給される物資の量は6万4千トンでしたが、これはアメリカの主要な港の一つであるボストン港で1週間に荷下ろしされる量に匹敵したそうです。



とっこう 日本軍の最終兵器「特攻」

米軍を震え上がらせた「神風」(かみかぜ)

1944(昭和19)年暮れのフィリピン戦で戦力を消もうした日本軍の航空部隊は沖縄戦までに戦力を回復する時間的余裕がありませんでした。

このため、効果が大きく、訓練が容易で、技量未熟者でも可能な「**体当たり攻撃**」を沖縄戦での戦法として採用しました。

1945(昭和20)年3月中旬、日本軍は「特別攻撃隊」(通称「神風」)による作戦を発令、海軍と陸軍はそれぞれ「菊水作戦」(きくすいさくせん)と「航空総攻撃」の準備に取りかかりました。

特攻作戦は第1次から第10次まで行われ、陸海軍合わせて約1,600機が出撃し、約3,000人が帰らぬ人となりました。



警戒網を海面すれすれに突破してくる特攻機(○枠内)

連続写真



戦艦ミズーリの右舷中部に突入寸前の特攻機



特攻攻撃を受けて炎上する空母バンカーヒル



第58.1機動部隊の統計によると、特攻機1機を撃墜するのに、平均で対空砲3,000発必要でした。

3月19日、空母フランクリンが特攻攻撃を受けて炎上、724人死亡、265人が負傷、1,700人が海上で救出されました。



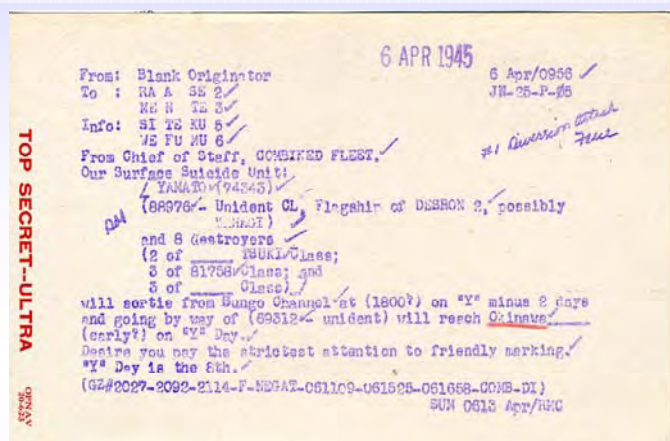
破られていた日本軍の暗号

あんごう

米国は、日本の外務・軍事関係の暗号通信を傍受し、解読することに成功していました。

県公文書館は、コードネーム「オレンジ」と呼ばれる、米軍が傍受した日本海軍の無線通信文を360冊ほど所蔵しています。それを見ると、特攻機による菊水作戦、地上守備隊による総攻撃などがいつ行われようとしていたかなどを米軍が事前に察知していたことが分かります。

また、米軍は沖縄近海を行き来する軍艦や輸送船の運行状況や積荷の中身まで把握していました。



無線傍受記録

米軍の沖縄上陸に対して海上特攻として出撃した戦艦「大和」が沖縄に到着する予定のY-Dayは、8日とされていました。

左の資料は大和の沖縄行きを告げる電文を米軍が解読翻訳したものです。

戦艦「大和」に関する無線傍受記録

戦艦「大和」の最期

日本軍は、沖縄に展開する米艦隊に打撃をあたえるべく、「海上特攻隊」を編成しました。投入されたのは、当時世界一の戦艦といわれた「大和」のほか、巡洋艦「矢矧」(やはぎ)と駆逐艦8隻でした。

海上特攻隊は、1945(昭和20)年4月6日に呉を出港し、8日に沖縄に到着する予定でした。しかし、その動きは暗号の傍受や米潜水艦の哨戒活動によって察知されていました。

米軍は、4月7日、400機近い艦載機で迎え撃ち、「大和」以下6隻を撃沈しました。



全速回避する戦艦「大和」



全速回避する戦艦「大和」



爆発炎上する戦艦「大和」

せんじ そうなん せんぱ 戦時遭難船舶

1944(昭和19)年のサイパン陥落後、日本政府は南西諸島の老幼婦女子・学童の疎開を決定、沖縄県に対しては10万人を疎開させる命令を出しました。45年3月までに約7万人が九州各県と台湾に疎開しました。その間、「開城丸」(かいじょうまる)「対馬丸」(つしまる)などの疎開船が米軍の航空機や潜水艦により撃沈されました。

“丸”の死体置き場

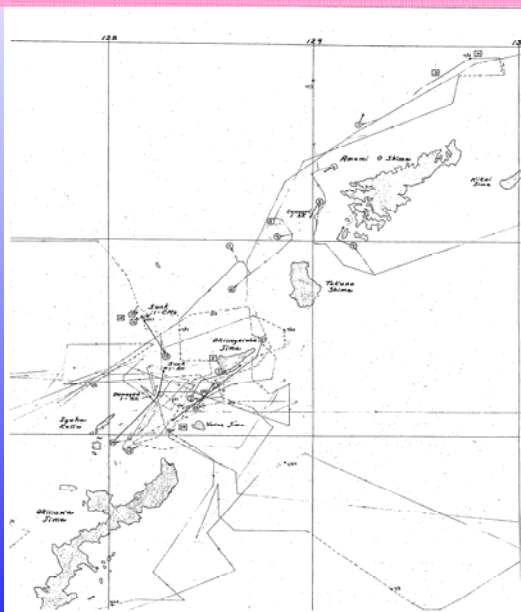
開戦後間もない1942(昭和17)年3月、「戦時海運管理令」という法律が成立し、民間の船も軍に徴用されるようになると、米軍は日本の補給路を絶つために、軍民の区別なく攻撃しました。

米軍は日本の艦船がよく通る海域に「ヒット・パレード」(Hit Parade)、「船団大学」(Convoy College)などとニックネームをつけ、通過する軍艦や輸送船を次々に沈めていきました。*

そのうち南西諸島海域は「“丸”の死体置き場」(Maru Morgue)と呼ばれ、学童疎開船の「対馬丸」や民間徴用船「嘉義丸」(かぎまる)、「湖南丸」(こなんまる)などが沈められました。

*注

- ①「ヒット・パレード」は本来、ヒット曲などのリストを指しますが、ここでは英語で「命中」を意味するヒットと語呂合わせになっています。
②「船団大学」は、そこをうまく通過しないと「卒業」できないという意味。



米潜水艦ハリバットの「台中丸」攻撃時の哨戒地図

戦時遭難船舶 (沖縄関係)

	船名	出港地	遭難月日	船客死没者
1	波上丸	サイパン	S17. 10. 7	不明
2	近江丸	クサイエ	S17. 12. 27	124
3	嘉義丸	鹿児島	S18. 5. 26	357
4	八重丸	大阪	S18. 8. 26	不明
5	湖南丸	那覇	S18. 12. 21	577
6	赤城丸	トラック	S19. 2. 17	512
7	夕映丸	トラック	S19. 2. 17	2
8	亜米利加丸	サイパン	S19. 3. 6	494
9	台中丸	鹿児島	S19. 4. 12	179
10	美山丸	パラオ	S19. 5. 14	27
11	ジョグジャ丸	パラオ	S19. 5. 15	7
12	千代丸	サイパン	S19. 6. 3	97
13	白山丸	サイパン	S19. 6. 4	277
14	神島丸	ロタ	S19. 6. 11	54
15	朝日丸	パラオ	S19. 7. 18	不明
16	宮古丸	奄美大島	S19. 8. 5	71
17	広順丸	パラオ	S19. 8. 12	15
18	対馬丸	那覇	S19. 8. 22	1,484
19	横山丸	マニラ	S19. 10	不明
20	千鳥丸	台湾	S19. 12. 6	不明
21	広善丸	テニアン	S19. 12	不明
22	開城丸	鹿児島	S20. 3. 24	109
23	第一千早丸	石垣	S20. 7. 3	不明
24	第五千早丸	石垣	S20. 7. 3	不明
25	照国丸	フィリピン	S19. 10. 8	不明
26	栄丸	基隆	S20. 11. 1	不明

「台中丸」沈没

「台中丸」(たいちゅうまる)は、1942(昭和17)年の「戦時海運管理令」のあと、国家徴用船となり、「嘉義丸」、「湖南丸」が米潜水艦によって沈没させられたため、代船として鹿児島・沖縄線に配属されました。しかし、1944年4月、米潜水艦「ハリバット」の魚雷攻撃を受けて、179名が犠牲となりました。

戦闘終結後も続いた悲劇

一般に沖縄戦の組織的戦闘が終わったのは、1945(昭和20)年6月23日とされていますが、戦争の悲劇は組織的戦闘終了後も続きました。

6月30日、石垣港から台湾へ出発した疎開船「第1千早丸」と「第5千早丸」が、7月3日、尖閣列島付近で米軍機の空襲を受け、第1千早丸が沈没、第5千早丸も被爆し、約45人が犠牲となりました。

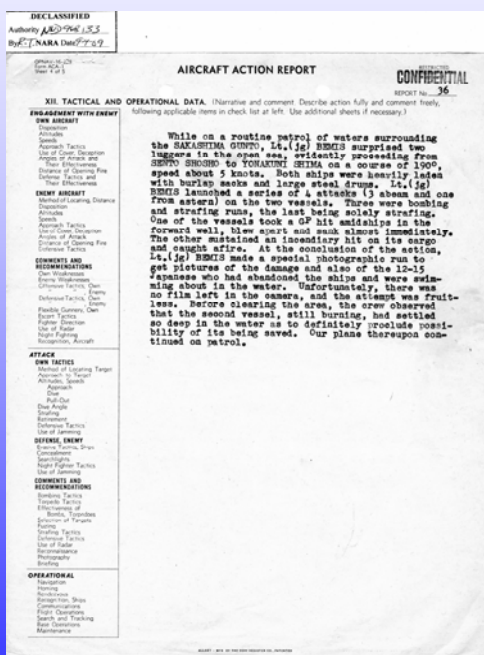
その後、第5千早丸で尖閣列島に漂着した人々は食糧難のため衰弱し、8人が死亡しました。数名が救助を求めて決死の覚悟で米軍機の空襲と荒波の中を石垣島にたどり着き、約50日後の8月19日に救助されました。



与那国沖航行中の船舶に対する攻撃(1945年7月3日)



与那国沖航行中の船舶に対する攻撃(1945年7月7日)



与那国沖航行中の船舶に対する攻撃報告書
(1945年7月3日)

<作戰報告書 翻譯>

先島群島周辺海域をいつものように巡回する際、見たところ先島諸島から与那国島に19:00の方向に約5ノットの速度で向かうラガー2隻を、ピーミス中尉は公海にて奇襲した。この2隻は黄麻布の大袋と大きな鉄製のドラム缶を大量に積んでいた。ピーミス中尉はこの2隻を、真横に3回、後方に1回、立て続けに計4回攻撃した。爆撃し、機銃掃射する航程があり、最後は機銃掃射のみで終わった。1隻は、船体中央部、前方ウェルに普通爆弾があたり、バラバラに吹き飛び、ほぼ即時に沈んだ。もう1隻は焼夷弾の攻撃を貨物に受け、発火した。この作戦の最後、この損壊と船から離れ水中を泳ぎ回る12～15名の日本人を写真におさめるため、ピーミス中尉は写真を撮りながら特別航行するが、運悪く、カメラにフィルムは残っておらず、その試みは無駄に終わった。この海域を一掃する前に、乗組員はまだ燃えている2隻目の船が海中深く沈むのを見届け、絶対にこの船が救出されることのないようにした。それから、われわれの重機は巡回を続けた。

**県公文書館は米
艦隊の作戦報告書
を750簿冊所蔵して
います。**

作戦報告書には作戦の概要、統計資料、作戦の教訓および次期作戦に関する勧告、そして写真などが含まれています。

これらの報告書は、これまで詳細が分からなかった遭難船舶の被爆の様子などを解明する上で重要です。

「記録」～未来の扉を開く鍵

とびら

かぎ

沖縄戦中、どれくらいの人が海上でなくなったのか、正確な数字は把握できていません。

26隻とされる「沖縄関係戦時遭難船舶」についても、遭難時の状況や犠牲者数は不明のままです。

そのような状況から、海の沖縄戦については依然分からないことが多く、冒頭で紹介した「沖縄戦って海でもあったの？」という疑問を持つ人が少なくないのです。

戦争とはどのようなものか、そしてそれが人々にどのような運命をもたらしたのか――。ここで紹介したさまざまな記録は、その問いに答えるための一つの「鍵」になるかもしれません。

多くの皆さまにご来館いただき、沖縄戦についての理解を深める機会にしていただければ幸いです。



カラーで見る沖縄戦
1945

米海軍写真資料